

「ひとづくり」・「まちづくり」を支えるミュージアム

卓 彦伶

北海道大学文学研究院特任准教授

文化芸術と地域社会の関係性を考える時に、文化芸術の本来的な機能に基づき地域や市民に伝えていく部分と、文化芸術の持つ力を活用し、地域課題の解決やまちづくり活動、観光への活用に結びつく部分が同時に存在しています。特に近年ミュージアムに求められる地域社会における役割・機能では後者の部分が強調されていると言えます。

今年度の事業では、キックオフシンポジウム「ミュージアム発の幸福論」からスタートし、前半の事業は、福祉・社会包摂、子ども教育、災害時のリスクマネジメント、地域文化を織り上げる記録と記憶など、我々に身近な領域においてミュージアムの実践と取り組みをテーマに取り上げました。展示を鑑賞することで幸せを感じることもありますし、ミュージアムという場を通じて生まれたコミュニケーションや交流によって心が満たされることもあります。さらに、ミュージアムの機能を通して、私たちの生活に身近な課題に働きかけることは、「幸福とは何か」、「誰にでも優しい社会とは何か」を考えるための手掛かりにもつながると思います。これは、まさにミュージアムが持つ「ひとづくり」の役割であると理解しています。そして、事業の後半では、ミュージアムの経営課題に着目し、経済学、評価学、財政学などの専門家を招き、新たな資金調達方法や評価手法について議論しました。ここでは、ミュージアムの価値は誰か決めるか、どのように決めるかという根っこの部分に触れました。ミュージアムを含む文化芸術を活用し、地域課題の解決、観光産業・地域経済への寄与など「まちづくり」の役割に対する適切な評価がなければ、ミュージアムの地域での存在意義も明らかにできないと考えています。

ミュージアムが持つ「ひとづくり」の機能を通じて多様な担い手が育成され、その人々が「まちづくり」に貢献し、地域社会に変革をもたらすことにつながります。そこにはまちの過去・現在に「寄り添い」、多様な主体との「対話」を通して、未来につなげるために仕掛ける学芸員の存在が大きいです。

1年目の事業は主に座学形式で実施してきましたが、実際にミュージアムの学芸員や文化施設に携わる関係者が日々向き合う各地の地域課題にどのように落とし込むのにまだまだ距離があるのではないかと思います。そこで、今年度から来年度にかけて北海道内のミュージアム学芸員と関係者を対象に、地域社会との間で生じている最新事例や各館の取り組みについてインタビュー・シリーズ「Insight on Site 地域とともにあるミュージアムの現場に学ぶ」を実施しています。その成果は映像と紙媒体のインタビュー集としてまとめて公開する予定です。このインタビュー・シリーズに関連して、今年度のクロージング事業の一環として、北海道内のミュージアム関係者約20名を集め、「地域とともにあるミュージアムのあり方を考える」と題して、各館が向き合う地域社会課題の特殊性や共通点についてお互い共有することを目的に情報交換会を開催しました。情報交換会では、「学芸員自体もひとつのメディアである」という話題の中で、各地域の社会課題に立ち向かう仕掛け人としてそれぞれが普段から感じている課題について話し合うができたことや、「今回のディスカッションで出た企画をさらに具体化していくための議論が必要だと思い、引き続きアイデアベースの今回のような形も開催してほしい」といった前向きな感想が寄せられま

した。引き続き、これらの成果を活かし来年度の事業につなげていきたいと考えています。

